「またダメかぁ……」

アルバイトに応募しても、届くのは不採用の通知ばかり。音大を出たあと、演奏家の道は早々に諦めた。講師でも目指そうかと思っているうちに、気づけば半年が経っている。とにかく今月の家賃が足りなかった。

音楽をやっていた頃は、金のことなんてそこまで考えなかった。奨学金で学費は賄えていたし、アルバイトもそれなりに入れていた。でも今は違う。卒業して肩書きが消え、『音大生』でも『演奏家の卵』でもなくなった途端、自分が何者なのかまったくわからなくなった。

求人サイトをだらだらとスクロールしていると、ひときわ目を引く募集が現れた。

『感覚過敏モニター被験者　登録説明会　参加費無料・謝礼高額・経歴不問』
（感覚過敏モニター……？ なんだそれ）

詳細を読むと、医療系ベンチャー企業が開発中のデバイスの感度検証に協力する被験者を探しているらしい。身体への負担はなく、所要時間は一時間程度と書いてある。謝礼の金額を見て、音無結は思わず二度見した。

（こんなに……？ 一時間でこの額は、どう考えてもおかしい。あやしすぎる。でも、この謝礼があれば今月の家賃を払える）

普通の面接では何十社も落とされてきた。変わった仕事のほうが、案外自分に合うかもしれない。金額への不安より切羽詰まった気持ちが勝り、結は応募ボタンを押した。

返信はその日のうちに届いた。当日は登録説明のあと、簡単な適性検査も行うと書かれていた。

登録説明会当日。少し古いオフィスビルの前で、結はスマホに表示された住所をもう一度確かめた。

（ここで合ってるよな……。ちゃんとしたビルだ。

変なアパートじゃない）

　きれいなエレベーターで上がり、指定されたフロアの受付で名前を告げると、廊下の奥へ案内された。通されたのは、窓のない小さな個室だった。パイプ椅子とテーブルが一組。壁際には見慣れない機材がいくつか並んでいる。

　白いシャツと、きれいに折り目のついたスラックスを選んできたのに、緊張でちっともまともな顔ができそうにない。

（今度こそ、何か掴めたらいい……！）

　扉がノックされ、入ってきた人物を見た瞬間、結は思わず息を飲んだ。

　細いフレームの眼鏡。白衣の下には黒いシャツ。すっきりとした黒髪がきれいに整えられている。背が高く、無駄な装飾は何もない。理系の研究者そのものといった格好なのに、顔だけが不釣り合いなほど整っていた。指も長い。

胸の名札には『夜嶋』とある。

（え、担当者がこんなに格好いい。変な意味で緊張するんだけど……！）
「音無結さんですね。担当の夜嶋です」

低く、抑揚の少ない声だった。感情が乗っていないのに、耳の奥へ静かに届く。

「よ、よろしくお願いします……！」

説明は、ごく普通の確認から始まった。体調や服薬の有無を聞かれ、同意書を一枚ずつ確認する。途中で中断しても謝礼は支払われること。嫌だと思った時点で手を上げれば、検査はすぐに止まること。内容を理解したうえで、結は署名欄に名前を書いた。

けれど、夜嶋さんの視線はどこか、結の答えではなく身体の反応をゆっくりとなぞっているようだった。

膝の上で組んだ手。脚の向き。シャツの胸元。見

られているだけで、肌がぞくぞくする。

（なんだか変な気分になりそう……）

膝の内側がむずむずして、結は無意識に太ももをすり合わせた。その動きを夜嶋さんに見られた気がして、かあっと頬が熱くなる。

ひととおりの確認が終わると、夜嶋さんは手元のクリップボードをそっとテーブルに置いた。結が膝の上で組んだ手へ視線を落とし、それからまっすぐに顔を見る。

「書類も、受け答えも、問題ありません。ただ、うちが本当に確認したいのは、そこじゃない」
「え……？」
「適性の実測に移ります」
「じ、実測……ですか？」
「うちが求めているのは、数値上の記録ではなく、身体の正直な反応です。……こちらへ」

結は『実測』という言葉が気になりすぎて、おとなしくあとをついていった。

案内されたのは、個室の奥にあるもう一つの小部屋だった。窓のない、こぢんまりとした空間。中央には、やわらかそうな長椅子が一つ。壁際の棚には、何に使うのかわからない小さな箱や機材が並んでいる。

扉が閉まり、かち、と鍵のかかる音がやけに大きく響いた。思わず振り返った結へ、夜嶋さんは内側のつまみに手をかけて見せる。

「プライバシーのために閉めただけです。ここからいつでも開けられます」

それを確かめて少しだけ肩の力を抜くと、夜嶋さんは『こちらへ』と長椅子を示した。

（長椅子……？ ここで何を測るんだろう……）

言われるまま腰を下ろすと、夜嶋さんは白衣を脱

いで椅子の背にかけた。ゆっくりとシャツの袖をまくりながら、結の前に片膝をつく。筋の浮いた長い指から、目を離せなくなる。

「緊張しなくていい。痛いことは、何もしないから」
「で、でも……実測って、いったい……」
「あなたの身体がどれくらい正直に反応するか。それを確かめさせてもらうだけです」
「た、確かめる、って……」

　言い終わる前に、大きな手のひらが膝の上へ置かれた。大きく骨ばった、男の人の手。その熱が、布越しにじわりと伝わってくる。
　夜嶋さんは焦らすように、黒いスラックスの裾をゆっくりとまくり上げていく。くるぶしから膝へ指を滑らせ、さらに布の上から太ももの内側をするりと撫で上げた。
　するりっ♡ すりっ♡ すりすりっ♡

「あっ！♡ ひぁっ！♡」

一瞬で、そこがじゅわっと濡れるのがわかった。たったそれだけで、腰の奥が切なくうねる。触られたのは太ももなのに、もっと奥まで触ってほしくて疼いてしまう。

「な、なにしてるんですか……！♡ こんなの、聞いてません……！♡」
「ほら♡ もう反応してる♡」
「ちがっ……！♡ これは、勝手に身体が……♡ だから、見ないで……ください……♡」

うつむいたまま答えると、夜嶋さんが小さく笑った。手を上げれば止めてもらえる。それでも、その声を聞いていると、もう少しだけ確かめられてみたいと思ってしまった。

「あなたの適性を確認するために必要なんだ♡」
「ひ、必要って言われても……♡」
「少しだけです。だめかな？♡」

眼鏡の奥からまっすぐ見つめられると、だめだと言い切れなくなってしまう。

「本当に、必要な検査なんですよね……？♡」
「もちろん♡」
「……その、少しだけ、なら……！♡」
「よくできました♡」

夜嶋さんはスラックスの留め具を外し、腰から膝までゆっくりと下ろした。露わになった太ももの付け根を指がなぞる。許したのは少しだけなのに、触れられた瞬間、身体がびくっと跳ねた。
すり♡ すり♡ すりすりっ♡

「んぁっ！♡ あっ！♡」

下着の上から、割れ目に沿って指が往復する。くちゅ、と小さな水音が立ちはじめ、恥ずかしさに顔から火が出そうになる。布がどんどん重たく湿っていくのが、自分でもわかってしまう。

すりすり♡ すりすりすり♡ すりっ♡
くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅくちゅっ♡

「や、やだぁ……音、してるぅ……ッ♡」
「濡れてる証拠だよ♡ ……よくできてる♡ こんなにちゃんと反応してくれて♡」

褒められたと思った瞬間、きゅんと子宮が鳴いた。叱られているわけでも、笑われているわけでもない。夜嶋さんにとっては、結の恥ずかしい反応も大切な検査のデータなのだ。それをすべて受け入れてもらえた気がして、嬉しさに涙がにじみそうになる。
夜嶋さんの指が、ついに下着の縁へかかる。そして焦らすように、それを横へずらした。外気にふれたそこがひやりとして、すぐにきゅっと縮む。

「ずいぶん、濡らしてるね♡ ……ここ、見せて♡」
「い、いや……そこは、見ないでぇ……ッ♡」
「だめですよ♡ 大事な確認だから♡ ……ちゃんと、見せて♡」

夜嶋さんはすぐに脚を開かず、結が力を抜くのを待っていた。やがて結が自分から両膝を開く。すっかり濡れたそこを間近で見られ、消えてしまいたいほど恥ずかしくなって身体をよじった。

それなのに、見られれば見られるほど、そこはとろとろと蜜をこぼしてしまう。

「きれいな形だ♡ ……それに、ここ♡」

長い指が、ぷっくりとふくらんだクリトリスにそっとふれる。

「ひぅっ！♡ あぁっ！♡」
「ここが、いちばん敏感なところですね♡ ……まずはここから、丁寧に確認させてもらうよ♡」

くりっ♡ くりっ♡ くりくりっ♡
くりくりくりっ♡ ぬちゅっ♡ くりっ♡

「あっ！♡ あぁっ！♡ やぁ……ッ！♡ そこ、だめ